

万葉

Manyo

左近充尚典最高顧問のご講演

相馬から、5年前にレソト王国首相がお手植えされた雪香プロスパーポローニアが花を咲かせたとの嬉しい便りが届いて間もない5月14日・母の日に、第2章52期4回の櫻華塾を開催いたしました。左近充尚典最高顧問は大変お忙しい中、奥様を伴い、自ら車を運転されて会場にいらっしゃいました。今年で89歳になると笑顔でおっしゃった時、驚きの声があがりました。大変お若くいらっしゃって、とても米寿を迎えられているようには見えなかったからです。

冒頭、小山副会長から「皆さん、母の日の今日はお母様に何かしましたか？」との問いかけに「はい！」と元気よく返事をしたのは若手メンバー達。親孝行をなささい、との会長の教えを受け、全員が日頃の感謝の思いを伝えたようでした。一方、祝われる「母」も一冊の会には沢山いらっしゃいます。「母の日にお母さんが元気で笑顔になれるようなプレゼントです」と、会員の鈴木幸一さんが「一冊の会の母」へとカーネーションを送ってくださり、代表して左近充昭子様にお渡しいたしました。また、一冊の会の永遠の母である相馬雪香先生の分は石田理事長がお受け取りくださいました。櫻華塾に集う女性メンバーも家庭に戻れば一人の母です。母であるメンバー全員に真心のこもったお菓子のプレゼントがあり、鈴木さんの真心が伝わり笑顔が溢れたひと時となりました。鈴木さん、そして大槻会長、小山副会長をはじめとする「一冊の会の母」の皆様に心から感謝申し上げます。



左近充尚典最高顧問の奥様、昭子様

左近充尚典最高顧問の講演の前に、いくつかお知らせ、報告等がありました。

◆一冊の会文庫本メンバー紹介

石田理事長から『1946.4.10～初の婦人参政権行使と日本女性自立への^{たびだち}出発』の文庫本執筆の責任者が発表されました。大槻会長、小山副会長、箱根常任参与、平間さん、新井さん、横山さん、鳥飼さん、上ノ町さんが中心となります。他のメンバーも協力し、皆で宝の文庫本を完成させましょう。

◆国際女性地位協会 30周年の総会

大槻会長、小山副会長が参加。随行した感想を新井さん、横山さん、佐藤さんが発表いたしました。



「男女雇用機会均等法があるかないかで大きな違いがあり、今の女性活躍社会は均等法のおかげであることを実感しました。」「赤松先生の講演を聞き、202030実現への思いと均等法生みの親である赤松先生への感謝の気持ちが高まりました。」「一冊の会の歩みを発表する中で、18年前から一冊の会は山下泰子先生よりクオータ制を学んでいることを紹介したところ、会場から感嘆の声が上がりました。継続して学び続ければ分からないものも分かるようになってくるし、これまでより一層身を入れて頑張ります」と決意を伝えられました。

◆男女雇用機会均等法について

先日のNHK(Eテレ)で放映されたETV特集「暮らしと憲法 第1回男女平等は実現したのか」を視たメンバーも多数おりました。瀧川より赤松良子著『均等法をつくる』の一部抜粋を朗読。実は均等法作成時、反対をした社長がいたことは語られない事実です。企業側と女性労働者の立場の意見調整に大変なご苦労があったそうです。

◆語り部を募集

一冊の会として東北支援の語り部を柱とします。東北支援も113回に渡るため、語り部として語ることは沢山あります。ぜひ立候補をお待ちしております。その他、一冊の会の歩み、赤松先生について、国連の流れに沿った活動、

等のテーマも募集しております。

◆レソト王国国王陛下王妃陛下歓迎の晩餐会で素敵な舞をご披露いただいた「菊の会」について

すでに公演の予定があつたにもかかわらず、国威にかけて覚悟を決めて当日雅叙園で舞を披露してくださいました。本当にありがとうございました。

◆櫻華塾の開催場所について

尾崎行雄記念財団の応接室で櫻華塾を開催できるのは一重に石田理事長のおかげです。今年の12月から立て替え工事が始まり、9年半後に新しい建物ができます。約10年後、新しくなった建物でも、応接室で櫻華塾を開催いただくお約束を石田理事長に乞ひ願いました。

そして、今回の最高のプレゼントである、待ちに待った左近充尚典最高顧問の講演です。鹿児島出身で、男尊女卑の文化で育てられたことを切り出し、『均等法をつくる』を要約した資料を配布したことを、園田天光光先生に「薩摩男児がよくやった」と褒められたエピソードを懐かしそうに語られました。結婚して66年、一番年上のひ孫が14歳なので、憲政記念館が新しくなる10年後にはもしかしたら玄孫に会えているかもしれないと嬉しそうに話され、夫婦円満にも繋がる「考えの転換」について語って下さいましたのでご紹介いたします。



フィクションの話です。喫茶店にきたお客の紳士の白シャツにウェイトレスがコーヒーをこぼして汚してしまいました。その時に紳士の言った言葉「シャツは洗えば汚れは落ちる。でも今この女の子を叱ったらこの子は一生傷つく。どうかこの女の子を責めないでやってくれ。」自分の受けた被害に目を向けるのではなく、相手の事を考えた一言を発する事で、周りのお客さんもホッとて空気が明るくなった。この切り替えの仕方は皆さんのヒントになると思う。

また、これは私の実体験です。大阪の師範学校にいる時に空襲があり、伊丹空港方面が狙われているのを、校庭で見ていたところ「伏せろ！」との教官の声に咄嗟に伏せた、その横30cmを銃弾がかすめていった。血気盛んな17歳だった自分は、鉢巻をして自分達も戦わせて欲しいと仲間と一緒に校長室に乗り込んだ。そこで校長先生が涙を流して言った言葉は「我慢しろ。日本を大事にする思いとお前の力をもって50人養え。それがお前の責任や。」終戦を迎え、あの時狙われた自分が助かったのは、アメリカ兵があえて弾を外してくれたのではないかと想像した。そう思ったからアメリカ人が好きになった。誤解かもしれない、でも考え次第で気持ちは変わるものだ。

広島と長崎の原爆投下について、心よりご冥福をお祈りする。そして心の中で「ありがとう」を付け加える。原爆の為に亡くなられて大変だった方が大勢いる。でも今自分が生きているのは、みなさんが生きているのは戦争が終わったから。原爆の死者を悼み、ご冥福をお祈りするとともに今を生きる我々を救ってくださったことへの感謝の思いを片隅に持っている。

最後に石田理事長より御言葉をいただきました。戦争の体験から左近充先生が学ばれたこと、発想の転換、感謝の気持ちを我々の中で活かしていくことが大切です。尾崎行雄の89歳は、民主政治読本を書き上げた年。人生の本舞台はこれから。これまではこの先10年20年のための準備期間。これからも我々にご指導いただき、ぜひ第一線でご活躍いただきたいと思ひます。そして、本日は母の日。



相馬雪香は難民の母と言われるが、社会貢献の母は大槻会長です。我々が社会貢献をすることが大槻会長への恩返しであり「親孝行」になります。雪香プロスパーポローニアの花に被災地の方がなぜ勇気づけられるか。その花に我々一冊の会の多くの顔を思い出して視てくれるからです。思ひの繋がる活動、途上国の支援を一冊の会を通じて行っていく決意をもって明日からまた歩んで参りましょう。

左近充最高顧問の胸に刺さる貴重なお話に胸がいっぱいになりました。「考えの転換」という学びを活かしてまいります。そして我々一人ひとりが真心の社会貢献に取り組んでいく思ひを新たにした櫻華塾となりました。最後に恒例の集合写真の他、グループ毎にも写真を撮ってくださったことも、大変ありがたく楽しいひと時でした。

文責：平間・瀧川 編集：赤田